

## 【会長賞①：小学生の部】

### 「おばちゃんから学んだこと」

香川県・高松市立鶴尾小学校

2年 大和 明大 さん

ぼくのお母さんのしりあいに左手と左足がつかえない人がいます。いつも、左手と左足にサポーターみたいなものをまいています。左手と左足がつかえないだけで、ふつうのおばちゃんです。

あるとき、ぼくは、おばちゃんにどうして左手と左足がつかえないのか聞きました。すると、おばちゃんは、

「3さいのときにじこにあってね。それで、左手と左足がつかえなくなったの。」と、明るくわらいながら言っていました。ぼくは、ふしぎでした。どうしてそんなつらいことを、わらいながら言えるのか？

おばちゃんは、こんなことも言っていました。

「この左手左足でね、たくさんわらわれたよ。ようかいみたいとか、気もちわるいとかね。しんでやろうかと思ったけどね。まだ、右手右足があるやんと思っ  
てね。それに、わるいことばかりではなかったよ。やさしくしてくれる人もいたよ。」

ぼくは、すごいなと思いました。とつても心がつよいなと思いました。かた手やかた足だと、できることよりできないことが多くて、ぼくがふだん当たり前にできていること、はしったり、ゲームをしたりすることが、おばちゃんにはできなくて、でも、一生けんめいに前をむいて生きているおばちゃんがかっこいいです。おばちゃんは、ぼくにおにぎりをはぎってくれました。右手だけではぎって  
くれました。三角のおにぎりでした。ぼくは、とてもびっくりしました。どうしてそんなことができるのか聞くと、おばちゃんは、

「おばちゃんのむすめがね、小学生のときに三角のおにぎりがたべたいって言ったの。さいしょはできないから、ごめんねって言ったんだけどね。でもね、何とかしたいと思ってね。まい日、まい日れんしゅうしたんだよ。できたとき、むすめがすごくよろこんでくれてね。おばちゃん、あのときの気もちずっとわすれてないの。だから、今がんばれているのかな。できないことでも、やってみたら  
できることもあるんだって思ったよ。」

って言っていました。

そして、おばちゃんに、学校すき？と聞かれました。でも、ぼくは、こたえられませんでした。自分の気もちが分かってもらえなくて、いやなことがあると、

とっでもとっでもつらくて心がどうにかなってしまいそうなときがあります。でも、よく考えてみると、おばちゃんは、左手と左足がつかえなくてもあきらめずに一生けんめいに生きている。できなかったことも、どりよくをしてできるようになったんだ。ぼくも、おばちゃんのように、くよくよせずに、明るく強く生きたいと思いました。おばちゃんの話聞いてまたがんばっていこうとゆう気が出てきました。